

フィールド調査では健康第一が失敗しないための第一歩

下岡順直

したおか よりなお / 京都大学大学院理学研究科附属地球熱学研究施設研究機関研究員

フィールドは、とても面白く興味深い。しかし、そこは非日常的であり、心身ともに緊張の連続である。そんな中で充実したフィールド調査を遂行するためには、やはり健康で元気であることが第一である。

はじめに

2013年1月、フィールド調査を行う私にとって衝撃的なニュースが飛び込んできた。多数の死者が出たアルジェリアでの人質事件である。多くの犠牲者に哀悼の意を表したい。私に入る情報のほとんどは、マスメディアによるものであるが、多くのエンジニアや労働者が犠牲になったとのこと。彼らは故郷を離れて遠い異国で生活しながら、大きな成功を夢見て日々の仕事をこなしていたと

パキスタン、ヴィーサル・ヴァレーでの調査。警護に警察官（右端）が同行する。足下には、旧石器時代からインダス文明期に製作された石器が足の踏み場もない程、点在している。



考えると悲痛な思いである。

私が参加する調査では、なるべく治安の悪い地域には行かないようにしているが、パキスタンでの調査では、銃器を所持した警察官が護衛についてくれた。これは、万が一のためである。モヘンジョダロの見学に行った時には、対応して下さった現地の先生から、夕刻以降は大変危険だから午後5時までには帰路につくことと仰せつかった。また、規模は小さかったけれど、町中で遭遇したデモ隊を見て、このようなことに慣れていない私は顔には出さないようにしながらも少々肝をつぶしていた。すると、同乗するドライバーが「心配ない!」と気遣って声をかけてくれたのであった。

別の国では、地雷が埋まる危険地帯と隣り合わせのフィールドもあっ

た。実際に目の前にある立ち入り禁止区域を示すマークの存在は、テレビの中で映るものと違う独特な緊張感をもたらした。さらに、調査に入る地域がたとえ安全だとしても、近隣地域で情勢が不安定な時は、日本で待つ家族の心配も募るだろう。今回の事件の動向を聞きながら、上述したようなことが私の脳裏をよぎった。とても人ごとではすまされない出来事であった。

健康あつてのフィールド調査

その昔、冒険家植村直己の紀行文を読み漁ったことがある。彼が信念とした言葉として、「決して山で死んではならない」というのがあったと記憶している。大変大げさかもしれないが、フィールド調査で無事に戻ってくることが第一と私は思っている。それは国内外問わず、生きて帰ることは当然であるが、それと同時に「元気に!」である。フィールド調査で私が最も大切と思っているのは、調査の間健康で元気に過ごすことである。

今回のテーマである「失敗する」を伺った時、私の経験では、調査での失敗というのはほとんど思いあたるところが無いと思った（いや、喉元過ぎて忘れていただけかも?）。私のフィールド調査の主要目的は、考古遺跡やそれに関連する火山噴出物や砂丘などの年代を測定するために試料を採取することである。調査には、現地をよくご存じの方と一緒に調査の面、そして宿泊場所や食事など生活の面で困ることは多くはない。また、昨今の研究費獲得の都合上、支出した調査費に見合った調査成果を挙げなければならないから、成果

ルミネッセンス年代測定のための試料採取をはじめ
る直前。この方法では、遮光した状態で試料（こ
こではレス堆積物）を採取する。暑かろうが、寒か
ろうが、どこでも暗幕を被っての作業。暗幕内の作
業は、土埃がひどいのでマスクをするが、毎日全身
砂まみれである。（東北学院大学 佐川正敏先生撮影）



インド・ラージャスターン州、アヌ
プガル近郊の食堂で。チャパティーを
焼いている主人と、奥には料理が出て
くるのを待つ調査同行者。



中国泥河湾地域で
の調査最終日の夕
食。現地で現場を
案内していただく
衛奇博士（右から
3人目）や調査同
行者と共に（筆者
は後部左端）。



ゼロはなんとしても避けるような調
査計画が初めから立てられている。

さて、そうした中において調査で
最も気をつけたいのが、健康面であ
る。フィールド調査は、灼熱の砂漠
の場合もあれば、極寒の大地の場
合もある。その上、度重なる過酷な
移動を余儀なくされることもあるの
で、健康でなければとても弾みをつ
けて調査など遂行できない。また、
病気になるれば、自分が苦しくつい
思いをするが、同行者にも迷惑や心
配をかけるだろう。年代測定は、試
料採取後、研究室に戻ってから年代
値を求めるための作業が続くので、
フィールド調査が終わったとしても
体調を崩す訳にはいかない。これを
フィールド調査での失敗に入れるか
どうかはいろいろとご意見もあろう
が、私は健康を維持できないのは
「失敗」の始まりであると自分に言い
聞かせている。

フィールドで健康のために 気をつける

長期旅行同様、フィールド調査は

非日常の連続である。それは大変心
躍ることであるが、身体的にも心理
的にも、かなりの負担がかかる。何
分、おちょこちよいな私は、何事
も失敗しないようにいつも以上に気
を張っている（つもりである）が、
やはり普段と違う環境が少しずつ健
康の歯車を狂わすのだろう。例えば、
現地でいただく食事についても、内
臓があまり丈夫とはいえないので、
できるだけ気をつけながら楽しむよ
うにしている。どこでも現地食は
おいしくて満腹まで食べたいが、それ
を我慢して腹五分程度にする。それ
でも栄養を吸収する腸がなかなか許
してくれない。いくら気をつけても、
だんだんと内臓が疲れてくるのがわ
かる。また、睡眠もとっているつも
りであっても、夕食後はその日の調
査を整理したり次の日の準備をし
たり、はたまた洗濯をしたり、夜空
をながめたり……となれば、疲れも溜
まりやすい。さらに、大陸の奥地へ
行くと、空気の乾燥も日本の冬以上
であり、呼吸器官へのダメージも大
きい。

そんな中、身体に対して一番の打
撃は、冷たい水の行水だろう。外国
に行くと、お湯のシャワーというの
は大変貴重だとつくづく思っていま
う。水浴びは、暑い地域であれば大
丈夫（また、若いから平気さ!）と
思っていると、これが意外と落とし
穴である。少しずつ体力を奪われ
ていくようで、風邪を引く一因にな
る。インド北西部、ハリヤナ州から
ラージャスターン州へ、インダス文
明に関わる調査へ行った12月であ
っても、現地では半袖も可能な程の
暖かさ。それでも、水浴びに移動疲
れも重なって、帰国間際にはちょ
としんどいかなという体調であつた
が、帰国3日後には高熱とその後一
月半余りひどい咳に悩まされること
となった。

他の失敗談では、3月半ば頃、考
古遺跡の発掘調査に参加して九州
へ行った時のことである。作業を
するメンバーの中で風邪（もしか
したら、インフルエンザだったかも
しれない……）が流行りだした。大
部屋で寝起きをするので、瞬く間に

風邪が蔓延したようである。私も
漏れることなく、風邪を頂戴してし
まったのだが、その遺跡での調査
が終わった後、引き続き別の場所
で年代測定用の試料採取が待つて
いた。まだ風邪の初期と思われた
ので、雪の降る中、無理して作業を
を行い、辛うじて帰還した。しかし、
戻ってきた途端どうにも体が動か
ず、なんとか病院へ行って点滴を打
ってもらったが、その後起き上がれ
なくなった。言うようにして家に
戻ったものの寝込んでしまった。最
悪なことに、調査から帰ってきて
すぐなので、一人暮らしの家には
お米しかなかった。結局、お土産
にご飯で栄養補給を行ったのだ
った。

気がついて行ってください！ そして、帰ってください！

フィールド調査は、とても面白い。
見て、触れて、聞いて、食べて、匂
いをかいで、そして感じて……。日
常を離れたその体験は、その時々
で思い出となり、日常に戻った時、
この思い出が時間旅行になる。年
代測定を行いながら、時空を超え
てデータを解析する時、まさに至
福である。しかし、時に調査中に
危険なことにも遭遇するだろう（
試料採取の時に、掘った穴が崩
れて埋まってしまうことある）。
調査が成功するためにも、健康に
フィールド調査を遂行して、無事
戻ってくるのがまずは一番だと思
う。